ザ・パスポート

帰国者の裁判を考える会
東京都港区新橋2・8・16新橋石田ビル4階 救援連絡センター気付 電話03(3591)1301
郵便振替 00120-2-398834「帰国者の裁判を考える会」 定価200円 年12回分 3000円

71

1998年5月10日発行

＜西川勝さん弁護団会議＞

都合により会議を延期しました。
西川さんは元気です。接見禁止が継続されたままです。

＜71号目次です＞

2ページ
☆目次・西川さん近況・会計報告
レバノンの弁護士・裁判費用カンパのお願い　Hさん
3ページ
☆社会人一年生＜2＞　吉村和江さん
4～6ページ
☆レバノン・ルミエ中央刑務所・拘置所暴動はどうなった？！　Mさん
7ページ
☆4．22アラブ諸会での反テロ協定調印　Mさん
8～11ページ
☆南部レバノン・カナ（QANA）虐殺2周年　Mさん
12～13ページ
☆ベイルートの空と海は青かった（続々）　OWさん
14～16ページ
☆駐レバノン日本大使・石垣、日本赤軍の引き渡しを語る！　Mさん
17ページ
☆春　Hさん
18～19ページ
☆読者へ　浴田由紀子さん
20ページ
☆編集後記　YWさん

先月もカンパを寄せてくださった皆さん！
どうも有り難うございました！！

ですが．．．今回新たに、多額のカンパ要請をしなくてはなりません。レバノンで拘束されている、岡本さん、和光さん、足立さん、戸平さん、山本さん５名の弁護士費用を支払わなければいけません。総額３００万円です。今現在会の会計事情は明記のとおり、－２００万近い借入金を抱える万年赤字の苦しい状態ですが、３００万円という大金が必要です。

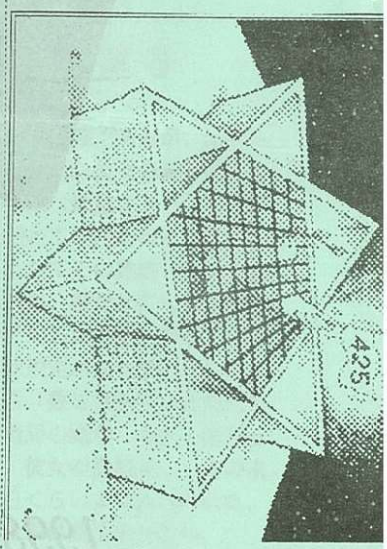
レバノンで彼らが拘束されて１年以上が過ぎました。当初弁護士費用は彼らの所持金から支払われる予定でしたが、そのお金はどうやらネコババされてしまった様で、今はいっさい支払われておらず、弁護士もそれを理由に接見等、ストライキ状態に陥っています。ただですら交通権確保が難しいのにこれはかなり深刻です！

目標額300万！！　どうにか夏までにつくりたいと思います。私達が汗水流して働いてもやはり限度があります。

私達も頑張りますので是非皆さんも協力してください！！

会計報告
（98年4月24日現在 3/28～4/24日迄）

収入	
カンパ	￥32.900
購読料	￥3.000
会費	￥11.000
レバノン滞在費清算	￥24.750
計	￥71.650
支出	
レバノン・通信費	￥21.060
切手代	￥81.000
計	￥102.060
繰越金	￥234.524
収入	￥71.650
支出	￥102.060
繰越借入金	￥1.940.000
計	￥－1.735.886



社会人一年生<2>

吉村和江

今月で見習い期間の3か月が終わり、一応少しはまともな掃除が出来ると見なされることになりそうです。本人としては、とても一人前とは言えないという気分。

朝8時から9時半までの間に、給湯室の床ふき、三つの会議室のテーブル拭き、6階から1階までの階段を掃いて拭く、これをこなさなくてはなりませんが、言うは易く行うは難し。8時半頃から学生が来ますので、悠長にやっていますと、階段を昇降する学生の感情に巻き込まれて身動きが出来なくなります。

掃いて拭くのがなぜそんなに難しいのかと、疑問に思われるでしょう。リノリウムの床に付けられたヒール・マーク（靴の踵で擦った跡）を布たわし様の物で擦り取らねばなりません。これを足でやるわけですが、今流行のヒールの太い靴には泣かされています。ちょっと足を引き摺った位なら簡単に取れますが、力一杯擦られると・・・取れません！中にはハイヒールの踵でリノリウムの床を抉ったものもあり、こうなるともうだめ。

三ヶ月間、毎日のように、床のヒール・マーク落としをやったものの、一瞥だけで「あっ、これは取れる」と分かるようにはなっていません。私の班の先輩の方々は、分かります。一年もやったら分かるようになれるかもしれぬ、精進、精進です。

布たわし（お茶碗を洗うスポンジの裏についている緑色のもの。業界ではパットと呼びます）を水で少し湿らせると良いと教えてもらい、「なるほど」とやっていましたら、先輩は「湿らせない方が良い。せっかくきれいにした床を靴跡付けられるから」。これも「なるほど」。どちらも一理あります。新入りとしては、どう教えて頂いても「はい」と返事して、教えて頂いた通りにしなくてはなりません。困るのは違うやり方を教えてくれた先輩の顔を覚えておいて、その先輩が通りかかった際、「これこの通り、教えて貰ったようにやっております」とデモンストレーションをして見せねばならぬことです。

それから作業中に景気づけに歌など歌うのもひんしゅくを買うようです。私は歌と踊りが大好きなので気分よく汗を流しながら（特にヒール・マーク落とし）歌を小声で歌ったりしました。しかし・・・どうもまずいらしい雰囲気。口笛もまずいらしい。あっ、つまらない。

班の盛りが通り過ぎようよしておりますが、花弁が私達掃除人の敵とは知りませんでした。曰く何は山桜、しだれ桜、八重桜と桜がたっぷり咲きましたて、「あっ、きれい」と感嘆。すると班の先輩の一人がため息と共に申しました。「きれいだけど、早く終わって欲しい気もするのね」。「ウーム、どういうことなのかしらん？」と不審にしておりましたら、雨の日にこの疑問が氷解。人間が桜の花弁を靴の底に付けて、と申しますか、花弁がともかく靴底に付いてきて、所かまわず落ちるのでした。雨の日に。

こういう日は、朝と昼休みの後の2回、階段を掃かねばなりません。で、私も、雨の日となると、気が滅めて仕方ありません。階段の汚れ具合が気になって。

ですから、皆さんにお願いしたいのです。廊下や階段では、足を引き摺らないようにして下さい。きっと、職に入る時は、マットで靴の底を良く擦って泥や花弁を落としてください。私達掃除人も頑張りますけど、皆さんのご協力をお願いします。

レバノン・ルミエ中央刑務所・拘置所暴動はどうなった？！

①事実経過

＜4月6日＞

夜、暴動開始される。刑務官長のターレック・マタールが獄中者にアルコールをかけて火を付けたと言われている。

＜4月7日＞

午後に暴動が本格化した。4名が軽症。これは刑務所長ムジィール・アル・アヨウーブと他3名の獄中者である。刑務所長は、獄中者に火を付け、軽症を負わせたことにより、当局に処罰されている。暴動に参加したのは役1000名で、中には鉄棒・ガラスの破片などで武装している者もいる。彼らは房を出て、ガラスを破り、毛布を燃やした。ルミエには役3000名の獄中者が居る。レバノンの75%の獄中者がここに居るという数字である。刑務所の周囲は100名の兵士が展開した。

親族たちは刑務所の周囲で"座り込み(シィット・イン)"を行い、獄中の親族の情報を要求した。(レバノン・FUTURE TVより)

ルミエ中央刑務所に暴動鎮圧の為に新たな保安軍が投入された。獄中者たちは毛布を燃やして、処遇改善を要求している。この中央刑務所は3棟建てで3000名の既決囚が収監されている。(米国・CNNより)

＜4月8日＞

1000名の獄中者が暴動に立ち上がって一日経ち、事態は平静に戻りつつある。今日午後遅く、内務大臣ミッシェル・ムールが獄中者が提出した恩赦以外の要求に応じると約束した。刑務所の処遇問題は閣議で話し合うとも約束した。ムールは軍事裁判所の検事総長であるナスリ・ラフォードをこの問題の交渉役として伴ない、刑務所を訪れた。獄中者側の要求は、

1)恩赦 2)処遇改善(房内の人数減らすことなど) 3)裁判前の勾留期間の短縮などである。

＜4月9日＞

今日の人質救出作戦で3名の獄中者が撃たれて軽傷。ISFの声明によれば、「獄中者が刑務所のゲートに殺到し、脱獄を試み、人質を取った。4名の警官と1名の刑務官が人質にされた。人質は2時間後に釈放された。ISFが警告で射撃をし、2時間の猶予を与えたからである」とある。

2つの獄中者委員会が獄中者を代表して交渉に応じると7日のムール訪問時に一旦は落ち着いたが、獄中者はこうした約束を一切信用していない。

マタールは現在、軍事法廷で証言中である。

(レバノン・FUTURE TVより)

＜4月10日＞

レバノン内戦(1975－1990)以来の最大の暴動も平静に戻りつつある(CNNより)

＜4月11日＞

ISFがルミエ刑務所を完全に掌握した。親族が面会・差し入れに暴動開始以来初めて入った。これは親族と当局の刑務所周囲で継続している緊張関係を和らげる意図からである。7名の軽傷で病院に移送された獄中者の内の3名は、ルミエ刑務所に戻された。この日差し入れに入ったのは65名の獄中者の親族。但し、これは未決囚のみで既決囚については平静を戻してからとしている。軍事法廷の検事総長ナスリ・ラフォードは「この様なことを2度と起こさないためには、当局と人権協会の働き如何に係っている」と語り、被害は「500の房の扉、50のシャワー室の扉が壊された」とした。

＜4月23日＞

国会人権委員会は内務省報告のレバノンの刑務所の現状のレポートを検討する。ルミエの暴動により、重要性を増して焦点を浴びている。内務大臣のミッシェル・ムールはより現実的に実態調査・処遇改善を行うための特別委員会を設置するだろうと述べた。(FUTURE TV より)

②背景

直接の原因となったのは、マスコミ報道が上記から分かりますが、刑務官の暴行によるものだと思われます。さらに深い現場からの報告は今後、ルミエ刑務所からの手紙が手元に届けば、ご紹介致します。

マスコミ報道を総合的に判断してみると、背景としては2つが考えられます。

一つは、レバノン政府の閣議と司法委員会で92年12月31日以前の麻薬関連犯罪に対する恩赦が決定され、ルミエ刑務所の日本赤軍のメンバーからの手紙にあったように、ヤヒヤ・シャンマ(96年に麻薬取り引きで7年の重労働刑が執行されていた元国会議員)にも恩赦が適用され、ルミエ刑務所内で、恩赦による釈放の事務手続きの遅延などから、刑務所当局と獄中者の衝突に発展した。

もう一つは、物価高騰でベカー高原の元ヒズボラ指導者のトフェイリィが"ハンガーズ・リボリューション"を組織し、軍と実弾での衝突に発展し、かなりの数のトフェイリィ派がルミエ刑務所に勾留されており、獄中闘争として反政府活動を継続していた。

これらが直接的な原因とも思われますが、背景としては少し大きな流れの中で見ていく必要があります。

③拘置所・刑務所行政の実態

97年10月ぐらいから行われていた弁護士協会による獄中処遇改善要求が、国際赤十字委員会や司法委員会などとの連携で継続的に行われていた。この弁護士協会の要求内容は、①司法人権協会の設立②社会復帰センターの設置で、その柱は現在、内務省管轄である拘置所や刑務所を、司法省の管轄に移行させるというものである。こうした要求の具体的な進展として、すでに弁護士協会のシャキブ・コータバウィはスイス大使ギアン・フェデリコ・ペ

ドゥーティと10万ドルの助成金契約を人権協会設置に対して結んでいる。司法委員会のワジーハ・ハーテルは「勾留システム改善や刑務所内の処遇改善には少なくとも5年はかかるだろう」という見通しを示している。具体的な問題点として指摘しているのは、例えば、「24時間以上の勾留や、司法省発行の礼状があっても48時間以上の勾留は刑法違反である」と述べた。

また、国際赤十字の在レバノン代表ジーン・ジャック・フレサルドは「3年前に当局に刑務所・拘置所の視察を申し入れたら断られた」と指摘しながら、今回、新たに非公式に、視察することを申し入れた。

現状を数字として知る上で参考になるか否か分かりません(あまり当てに出来る数値でないだろう)が、ISF(内務保安軍ー現在は内務省直轄で、レバノンの仏からの独立前に刑務所統括を任され、その後のレバノン内戦時には仏によって統括された歴史がある)のイリアス・モガハァガハブは、一言で言って、「欧州諸国の施設以上に優れている。言わば、"欧州最上のホテル"とでも言える」と言いながら、数値として以下を出した。

☆刑務所・拘置所の年間経費は60億レバノン・リラ(約38万7000ドル=約5000万円)

☆700名の保安軍に更に80億レバノン・リラ(約51万6000ドル=約6700万円)

☆18つの男性刑務所、4つの女性刑務所、4つの中央拘置所、187つの地方拘置所

以上、数値を示した後で、900億リラ(約5800万ドル=約75億4000万円を向こう2年の見通しを含め、刑務所の環境改善予算として国会に要求した。更に、現状の保安軍の行政を肯定しながら、「一般犯罪は72時間以内に解決できるもので、麻薬やテロ組織に関わるものはそれ以上の時間がかかるのだ」と、その管轄が内務省から例え司法省に移行しても、ISFの役割は不変であると強調した。

暴動のニュースを聞いた獄中者の親族や友人がルミエ刑務所の周りに集まり、口々に「自分の息子がどうなっているか心配で来たんです。でも刑務所の人たちは私が息子に面会に入ることを許可してくれないのです」と、刑務所当局への不満を語った。

また、ある元獄中者は現在獄中に居る兄弟を心配して刑務所に駆けつけたのだが、自分の獄中時代を回想しながら、「奴等、刑務所の看守達は俺達をけだもののように扱うんだ。政府は国連から月20米ドルを獄中者一人当たりに援助として受け取っているらしいが、奴等は俺達のメシに1000レバノン・リラ分(約84円)しか使っていない」と政府の刑務所行政を批判した。

(4月9日デイリー・スター)

4・22アラブ諸会での反テロ協定調印

エジプト・カイロで22日、何百人もの武装警官に警備されながら、アラブ諸国の内務・司法大臣らが最初の反テロリズム協定に調印した。しかし同時に、外国勢力（これは"イスラエルを示す"と特記された）の占領に対する武装闘争あるいは、民族自決の為の解放闘争はテロリズムではないと明記された。94年のカイロでの反テロ会議から調印までに4年がかかった。

1、内容

調印された反テロ協定の柱は、テロリズムの定義であり、特に①政治犯罪とテロリズムの区別 ②政治的理由に拠るものであっても政治犯罪とは見なさない犯罪の一覧が合意された。その犯罪の一覧には、アラブ連盟加盟国の大統領・王室・副大統領・政府閣僚への攻撃と、国際法の保護下にある大使・外交官への攻撃も含まれた。また、各国の法律を遵守しながらテロ活動に直接関与したり、指示したり、財政支援したりしない点も合意された。テロ活動の情報交換やテロリストの引き渡しについても最大限、他の加盟国と協力しながら努めていくことも確認された。

2、調印までの経緯

この反テロ協定は8年前、エジプトやアルジェリアでイスラム原理主義が自国の政府の転覆を狙い、活動を活発に行っていた時期にアラブ連盟会議の討議のテーブルに上った。91年のマドリッド合意で包括和平に向けてアラブ諸国は歴史的に初めて、イスラエルと同じテーブルに一同が会した。93年のオスロ合意を経て、米国が中東和平会議で"包括的和平の仲介者"としての立場を、徐々に曖昧にしていった。そしてむしろはっきりとイスラエルの国益の立場に立ち、二重基準（ダブル・スタンダード）へと中東政策を転換した。米国はその後、96年サウジのアルコバール米軍宿舎爆破闘争を契機に、反テロ・反ドラッグ政策を中東に押し付けた。対してアラブ諸国は、こうした米国に全面的には対決する道を避け、米国のダブル・スタンダードの矛盾を突く政治的攻勢への準備を整えていった。湾岸戦争で多国籍軍に参加したサウジ・エジプト・シリアが米国に譲れる部分はトコトン譲り、中東の保安システム確立へ奔走し、逆に米国にボールを投げ返した。

3、調印の意味

特筆すべきは、イスラエルの出した"レバノン・ファースト提案"に対して、『アラブ諸国は最も不快で醜い組織的なテロリズムであるイスラエルの敵対行為に未だ服従させられたままである。イスラエルは無実の女性や子供たちを殺し続けている』と非難し、イスラエルの条件付き撤退提案を拒否したレバノンを支持し、イスラエルに南部レバノンからの無条件撤退を求めたことである。

4、今後の動向

米国は中東政策で自らの矛盾を深め、イラク核査察問題で見せた様に、軍事的緊張を自ら高めることで、自らの矛盾の解決を図るという悪循環に更に嵌まっていくことになるだろう。 （M）

南部レバノン・カナ（ＱＡＮＡ）虐殺２周年　（M）

1、イスラエルの提案

イスラエルが「レバノン・ファースト（レバノン第一）」提案を再び、政治キャンペーンとして出し、和平交渉ではマドリッド合意で確認された包括的和平の原則立場に立つレバノン・シリアの分断を図ろうと、国際メディアに訴えています。

2、政治的キャンペーンの内容

今年は、ユダヤ人虐殺の50周年。マスコミは挙ってこのイスラエルの"陳腐な提案"（イスラエルにより占領されている南部レバノンにおいて、国連でも承認されている抵抗権である民族解放闘争を闘うレジスタンスに対し、もし正規のレバノン軍がこの闘いを排除し、被占領地である南部レバノンを掌握し、"（イスラエルにとっての）保安が完全に回復"されたら、イスラエル軍／SLA（南部レバノン傀儡軍）はその占領を止め撤退する、という提案）を大々的に報道し、"平和"を壊しているのは、民族解放闘争を行っているレバノン側であるという政治宣伝を行っています。

3、提案の巧妙さ

この"提案"はすでに過去何度もネタニヤフやモデハイなどにより為され、レバノン・シリア側に拒否されてきたのですが、今回はイスラエル国会で国連決議425（占領している南部レバノン領からイスラエルの無条件・完全撤退）を承認して見せるなど、更に宣伝効果を考えた巧妙な提案にしています。

しかし、イスラエルが実際にやっていることは、現在も南部レバノンに対する軍事攻撃を今まで以上に大規模に展開するという言っていることとは全く正反対のことなのです。

4、イスラエルの戦争犯罪

96年4月18日、南部レバノンの村・カナ。イスラエルの砲撃・空爆でUNIFILのフィジー軍駐屯地に避難していたカナ周辺のレバノン人住民や、空爆を逃れ、更に南部の村からシェルターを求め国連の基地のあるここカナに辿り着いた人々。その全ては非戦闘員であり、またその大部分が女性達・子ども達だった。イスラエルは意図的に彼らが避難している兵舎を狙い撃ち、107名を虐殺した。

この虐殺は、国連の軍事専門家達にも明らかに"意図的な狙い撃ち"（しかも事前に偵察飛行もしていた！）だと非難されたまさに"戦争犯罪"です。

5、南部レバノンへの思い

96年4月、イスラエルの"怒りの葡萄"作戦による砲撃・空爆をフラッシュで実況するTV中継にベイルートのアパートで見入っていました。アパートの裏手のUNESCO周辺には

南部の村から避難してきた人々へ政府が支給するマットレスと毛布を満載したトラックが何十台も連なって停めてありました。学校は休校にされ避難民の臨時宿泊所にされました。"ウナーディーコン"（私は訴えたい！）の歌詞を是非覚えようと必死にな

ったのはこの頃です。97年3月13日、私は強制的に後ろ手錠で飛行機に乗せられ、レバノンを出国しました。ちょうどその日、レバノンは「南部レバノンの住民に連帯する日」で、公務員が皆、胸に連帯の意を表す黄色いリボンを付けていました。機内で「自分の生まれ育った土地を奪われ、放り出された怒りはどんなものだろう」とぼんやり考えました。

6、連帯って何？

97年4月18日、カナ虐殺1周年。私は、「帰国者」として、日本での生活を立てようと必死な日々を過ごしていました。「この現実に向き合おう」ということだけを考えていました。

98年4月18日、カナ虐殺2周年。現実に向き合い続けるしんどさと難しさを感じています。「連帯するって何だろう？」と考えながら、カナ虐殺2周年についてレバノン英字紙デイリー・ニュースの特集から抜粋・翻訳し、まとめてみました。一緒に考えて見ましょう。

注：カナ虐殺直後に地元住民に撮影されたVHSビデオあります。最近の中東情勢と97・2・15日本赤軍メンバー拘束劇の背景について簡単にまとめた集会資料あります。ご連絡は、救援連絡センターまでお願い致します。

<カナ虐殺1周年>

"私は外を眺め、そこに春の花が咲いているのを見つけました。「1年前は家族が皆、元気でここに居たんだ」ということを思い出しました。私はまだこうして神の御加護で生きていることが、やりきれません"（カナ虐殺の生還者ハメーダ・ディーブさん・28歳）

「その日、午後まだ早く、私たちは避難していた建物の会議室で昼食を食べました。そこはとても混んでいて約100名ぐらい居たでしょうか。私は何かいつもと違った気持ちがしたのを覚えています。乾燥していましたが、どんより薄暗い天気で、皆いつもより静かでした。それは何か皆、本当は何かが起きることを予期していたのに、誰もそれを認めたくないと思っているように感じました」

午後2時を数分過ぎた頃、3機のヘリコプターが上昇し、霊に消えた。プロペラの音も消え、代わって遠くから砲撃の音が聞こえてきた。

サァダッラー・バラァハスさん・57歳。彼は4月13日に妻と22名の家族を連れてここに避難してきた。

「私の息子は私の前の列に座っていました。砲弾は私の座っていた所から1メートルも離れていない場所で炸裂しました。私の子供たちは皆、粉々に千切れて死にました。彼らは私と爆発の間に座っていましたから。彼らが私の命を救ってくれたのです。炸裂した砲弾の破片が私の眼に突き刺さり、鼓膜は爆弾の衝撃波で破れました。私が顔に付いた血を拭うと、眼が抜け落ちました。私の弟が横に居たはずですが、見失ってしまいました。そこには肉片以外の何もなかったのです。子供たちの誰一人も見つける

ことができませんでした。彼らの跡形もなかったのです。

ファーテン・バラァハスさん、25歳。彼女は33人の親戚とここに居た。彼女とご主人は2回目の爆発があった時、子供達を抱き抱えた。

「ちょっとの間、全く音がしませんでした。部屋は煙が充満し、何も見えません。私は目が眩み、衝撃で感覚を失っていました。1分後、私は子供たちと夫を失っていることに気が付きました。一人ぼっちでした」

ムニーラ・タキさん、42歳。彼女は砲撃が始まった時、ご主人のイブラヒムさんと一緒に入り口に立っていた。

「ほとんどの人々は初めは静かでした。でもキャンプに最初の砲撃が命中した後は、パニックで泣き叫びました。2度目の炸裂で砲弾の破片が夫の喉を抉りました。彼が死ぬ前に発てた肺の空気を吐き出す音が、私が聞いた彼の最後の声でした。私は7か月の子供を抱いていましたが、神様が彼を救って下さいました。煙で8歳の娘ドゥニアを見つけることが出来ません。煙が晴れると、そこには彼女のパジャマの切れ端しかありませんでした。それ以外何もないくらい粉々になってしまっていたのです」

アァーデル・バラァハスさんは家族の前で本当の感情を露わに出来ない気持ちを語った。

「妻や娘の前では泣くことが出来ません。だから毎日、自分一人になって、泣くんです。私は息子や孫がいつも自分の目の前に見えるのです。この光景だけは決して忘れることが出来ません」

カナの悲劇は避難していた人々だけを揺さぶっているのではありません。サミーラ・ハジさんはカナの200名余りのクリスチャンの一人。カナの虐殺の当時、彼女はベイルートで3人の子供たちと一緒でした。

「テレ・リバン(レバノン国営放送)のニュース・フラッシュ(速報)で虐殺を知りました。私の義理の母と義理の兄がカナの国連キャンプに居たのです。私たちは翌日、サイダに行って、病院を片っ端から尋ねて廻りました。次はティールに移って探しました。その晩、私の義理の兄がティールのセント・ジョゼフ学校に避難していて生きているという知らせを受けました。早速、彼を尋ね、母がどこに居るのか聞いてみましたが、彼は「知らない」と言っただけでした。彼はすでに砲撃で眼を殺られ、視力を失っていました。私達は、病院の霊安室の中も探してみたいと申し出ましたが、病院の許可が貰えませんでした。それから13日後、合同慰霊祭でもまだ母の生死が分かりません。埋葬の時、私は(イスラム教の)僧侶に「遺体を検めさせてください」とお願いし、許可を得ました。私達はクリスチャンなので、これでイスラム教の教えを破ることにはなりません。そこで首に十字架を巻いた遺体を見つけたのです。それは間違いなく母でした」

UNIFILフィジー駐屯地のセラ・ダカイさん、駐屯地の歯医者として働いている。

「虐殺から2週間は眠れませんでした。カナの怪我人を助けることが出来なかったのです。住民を助けるのが我々国連の役目です。でも私は何も出来なかったのです」

＜カナ虐殺2周年＞

「僕は自分が笑うことが出来なくなってしまったんだと錯覚することがある。テレビでアンサールのサッカーの試合を見る時はいつも悲しい」

8歳のイブラヒム･ブルジ君は大きくなったらアンサール(スンニ派中心のプロサッカーチーム)でプレーしたいと思っていた。彼はカナの虐殺で右足の爪先を失った。

「アンサールは最高さ。いつかワールドカップで彼らが勝ったらいいな」

イブラヒム、姉のメルヤン14歳、いとこのゼイナブ13歳、ゾォーラ10歳は皆、カナ出身。UNIFILフィジーのキャンプに避難していて、親戚など親族18人を失い、孤児になった。

ゼイナブさんは「お母さんはイスラエルの砲撃が始まるといつも大丈夫だから寝なさいと言っていたが、本当は僕たちを安心させたかっただけなのが分かっていました」と2年前を振り返った。

「砲弾の破片が辺り一面に飛び散り、人々が叫びながら走っていました。一つの砲弾は私の目の前に落ちましたが、爆発しませんでした。フィジー兵士が爆発するといけないから逃げるんだとキャンプから出て、近所の民家に砲撃が終わるまで避難しました」

ほとんどの子供たちと同様にイブラヒム君はめったに虐殺について友達とは話さないと語った。子供たちは何かを懸命に耐えている。「私は今日、お墓にお祈りをして、コラーンの一節を両親の為に読みました」とゼイナブさんは語った。(デイリースター)

＜カナ虐殺2周年の報道＞

イスラエルの雑誌GAULD MAERは、この犯罪に荷担したイスラエル軍の分隊の兵士にインタビューし、それを発表した。それによれば、**"イスラエル軍兵士は無実のレバノンの住民を殺したことに対して何ら後悔の念を持っていない"**との結論に達したという。イスラエルの分隊長はレバノンの犠牲者について、自分の分隊の兵士達に**「奴等、人間の屑どもが君たちに砲弾を打ち込んできたんだ。そう、君たちは何をするのかね？まだ幾百万ものアラブ人どもが居るんだということは分かってるな」**

(4月20日／アラビック･ニュースより)

＜カナ虐殺2周年祈念集会の様子＞

アマルとヒズボラ双方により組織された集会には、2000名の生還者･虐殺された人々の親族が周囲を支援者に囲まれて集まった。駐屯のUNIFILフィジー兵士が掲げた横断幕には"あなたがたは我々の心を呼び覚ます。魂よ、安らかに！"とある。ヒズボラの黄色い横断幕には"我々兄弟である犠牲者達の血の一滴は、世界の人々に対する我々の叫びだ"と書かれた。アマルはアマルとレバノン国旗の両方を掲げ、「一つはレジスタンス、もう一つは国際社会にこの虐殺を戦争犯罪として問い質したいという意味だ」と表現した。バース党アブダッラー･アハラムは「イスラエルは50年のテロリスト日記に新たな1ページを加えた。今日、南部住民は涙を拭い、より強く生きる決意を新たにした。死の中で我々は生き残った。レジスタンスで我々は勝利する」と語った。

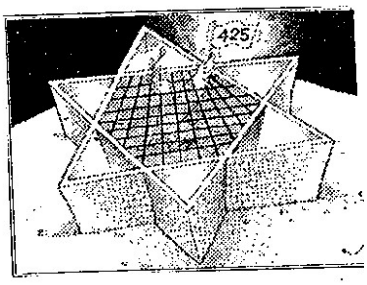
ベイルートの空と海は青かった（続々）

元「赤－P」上映隊　渡辺亜人

海に沈む夕陽がきれいだよ。と誰かが言っていた。午後4時半過ぎ、ピジョンロックがすぐ目の前に見えるレストランのバルコニーに行った。崖からつきでて、真下は海。さえぎるものが何もない海の向こうに、紅い夕陽が地中海に沈んでいく。夕陽が海に反射して、その紅い帯が自分のほうに向かってのびてくる。海岸沿いには大勢の人々が、同じように夕陽を見ている。彼ら5人をはじめ、この地にいた人達。そしてこの地を通りすぎていった人達も皆、この夕陽を見ていたのかと思うと何となく感慨深い。1時間程でサンセットのショータイムは終わった。散歩かたがたハムラ・ストリートまで歩く。日本を離れて1週間。食生活の変化にもあまり違和感は感じなかったが、何となくラーメンが食べたくなった。中華料理店に入ってメニューをみるが、麺類はない。しかたなくチャーハン、春巻きを注文する。そう言えば、この国の料理の品目にはスープ的なものは無いことに気がついた。

夜8時頃案内役のJ君よりホテルに電話があり、呑みに行きましょうとのこと。面白い飲み屋があるんですよ、と連れていかれたのは、まわりはほとんど真っ暗のビルばかりのなかにポツンと明かりの灯った店。入ると壁にはチェ・ゲバラやマルクス、トロツキー、レーニンの写真やイラストがところ狭しと飾ってある。岡本公三氏の写真もあるではないか。何人か名前の知らない人の写真もあるので聞いてみると、皆アラブ・パレスチナのコマンド達のようだ。天井には、ゲバラの顔が染め抜かれた大きな赤旗があった。30年前京大の時計台に一夜にして、ゲバラの壁画が描かれた。あれだけ大きなものを、見事なバランスで描いた腕前はたいしたものだと、当時話題になったエピソードを思い出した。私の隣で呑んでいるJ君も、髭をはやせばなんとなくゲバラに似ている。それを彼に言うと、嬉しそうに照れていた。彼は、背は1㍍80はゆうに越え90㌔はあろうという体。いつも明るくジョークをとばし、私達を気使ってくれる。彼の人柄をしたって多くの友人達が集まってきているようだ。彼はこれから、レバノンの若手活動家のリーダーとして活躍していくことだろう。

金曜日、今夜はJ君の友人O氏の実家があるトリポリへ招待されている。岡本ファンのおじいさんがやっているアラブ料理店があるので、そこへ行こうということになっている。トリポリはベイルートより北へ80キロ程行ったところ。午後4時半過ぎ、迎えに来てくれたJ君と、O氏の2台の車に分乗し出発。レバノンを南北に貫く海沿いの幹線道路をひた走る。途中ジュニエの街では、2・15で拘束され強制的に日本へ送還されたM氏がやっていたレストランの前を通る。2時間程で到着。トリポリはベイルートとは違い、古めかしいアラブの街という雰囲気。細い石畳の路地など、昔見た映画の中のワン・シーンのようだ。♪ここは地の果てアルジェリア～～～～「外人部隊」のカスバだったか、ハンフリーボガードの『カサブランカ』だったか？暗い階段をのぼるとO氏の家の玄関へ。居間に通され家族と挨拶。O氏の兄さんが家を継いでいるらしい。4、5歳の子供も含めて7、8人と



握手をかわしたか。皆なごやかに親しみを込めて、迎え入れてくれる。水煙草をやってみないかとすすめられたが、なかなかうまく吸えない。おもいっきり深く吸っていると、あまり吸い過ぎると頭がふらふらするぞと脅された。さあ、食事に行こうと件の料理屋へ。厨房を入れてもおよそ8畳程のこじんまりとした店だ。我々総勢8人で満杯。すでにテーブルには料理が出ている。ワイン、ビール、アラクで「ケーサック」「サッハ」（アラビア語で乾杯の意）。静ってきてアラビア語で話始められるとさっぱりわからない。政治談義であることには違いなさそうだ。それまで、もくもくと料理を作っていて笑顔もみせず、頑固一徹という風情の店のおやじが突然話に加わり、とうとうと演説をはじめた。内容はほとんど分からなかったが、ベートーベン、ハリーリ、ダルウィーシュetc 人名だけは理解できた。イスラエルとの闘いや内戦など、日々の生活が直接政治にかかわってくる国、日本のようにオブラートにくるまれたものでなく、むきだしの権力と日常的に接している人々。皆それなりに自分の主張をハッキリともっている。そして、じつに豊かな人間味をもっている。経済的にはこの国よりはるかに豊かな日本だが、物があふれかえるのに反比例して人間性がどんどん失われていく。そんなことを考えたトリポリ行きだった。

ホテルから歩いて10分程のところに、山本万里子さんが収容されている刑務所がある。建物は車の往来が激しい道路に面している。教えてもらわなければ、ここが刑務所とは分からない。救援運動にたずさわっている人達はこの建物の前を通る時は、クラクションを鳴らして激励するそうだ。

午後からは、3回目のルミエ刑務所行き。またまた差入れの食料をかついでムショの門前へ。私は前回の接見不許可があったので、自己規制（日和って）して入口の所で待っていた。5分程すると接見に入っていたS氏が戻ってきて、「足立さんがよんでいる」と言うではないか？・・・・・！！なんだ！これは！所内に入ることの許可は囚人がだすのか？！！と頭の中が混乱する余裕もなく足が勝手に動いて門の中に入ってしまった。検問の兵士は何も咎めない。足立さんに逢って開口一番！「この刑務所はどうなっているんだ」と言うと。「我々の自主管理だ！」と、偉そうにのたまうではないか。和光も出て来てニコニコしている。まぁ、もう一度逢えてよかった。彼らの健康状態、食料事情などを聞いて、出来うる限りの支援をすることを約す。前回の接見で和光や戸平、岡本氏へ、日本の家族へ手紙を書いてくれと要請していた件については、それだけは勘弁してくれと言われた。確かに今更、書きづらいことはわかる。でももっとも近しい間柄だった人達に、協力を求めることが出来ない運動って何なんだろう。若い時は、血の繋がりの家族関係よりも、同志的な繋がりの関係性の方が大切なんだといきがって、家族を切ってきたこともあっただろう。私もそうだったような気がする。しかし今になって思うと間違っていた。年齢を経るにしたがって考え方も、少しは変わってきたこともあるのだろうが、この地の人々の人の繋がり、家族の繋がりの素晴らしさをほんの少しだが垣間見たからかもしれない。つらいことではあるかもしれないが、彼らに家族への連絡をとって欲しいという願いを胸にルミエをあとにした。

（つづく）

駐レバノン日本大使・石垣、日本赤軍の引き渡しを語る！

このページは本来、レバノンに現在拘束されている日本赤軍メンバー5名からの手紙を掲載する予定でしたが、前回までに何度か報告している通り、レバノンの獄中との交通はそれ自体が、レバノン国家保安局や日本の公安警察との"攻防"です。また、ベイルートのルミエ中央刑務所は、

①日本の拘置所・刑務所とは全く異なる文明・文化であるレバノン当局により運営されており、

②面会及び差し入れは親族・弁護士にしか許可されておらず、

③手紙の発信・受信はそうしたシステムさえなく、

④また読者の皆さんもすでにマスコミ報道でご存知のように、4月初旬のルミエ刑務所・拘置所暴動の影響もあって、我々、救援会と彼らとの交通はこの間、全く途切れています。

従って、差し替えとして、レバノンのマスコミ報道から、日本赤軍メンバー拘束劇のその後に関する記事をご紹介することに致します。

中東・レバノンのマスコミ報道の視点がどう日本のマスコミの視点と違っているのか？レバノンの記者が何を勉強し、書いているのか？どうかご検討下さい。

今後とも継続的にこうした現地報道も交えて、2・15拘束劇を考える材料提供をしていきたいと思います。是非、じっくりとご覧頂き、ご意見・ご批判をお寄せ下さるようお願い致します。編集部一同、多くの声を心待ちしております。

☆☆☆

駐レバノン・日本大使・石垣のスウェーデン大使への転任前日のレバノン英字紙デイリー・スターの報道からの要約（要約はM担当）です。

1、日本赤軍の引き渡し問題

約3年の在レバノン大使としての籍を完了し、明日、ヘルシンキに移動する石垣大使。日本からレバノンへの援助では2つのポリシーが貫かれた。一つは、1億2000万ドルの貸付け金の用途は沿岸地帯の水質汚染対策と、もう一つはそれが小さな村落に向けられた点である。

日本赤軍メンバーの逮捕により、それと引き換えにレバノンへの経済援助を増大させる政策など一度もとったことがないと石垣は語った。「我々は95年6月に私が着任した後、ローンと沿岸汚染に関する代表団の訪問を受けた。2年前の（赤軍メンバーの）逮捕があって、心配したのは、これらの援助プランがダメになってしまうのではないかということだった」。同時に、石垣は「我々日本政府はレバノン司法を完全に信頼している。但し、3年の実刑執行後に日本への身柄引き渡しを繰り返し求めたい」とし、「彼らが日本で死刑になる可能性はこの間の司法動向を見ると極僅かだ」と強調した。また2国間（レバノンと日本の間）では身柄引き渡し条約が結ばれていないことを指摘されると、「そうした条約はほとんどの国と結ばれていない。5名はレバノン人ではないし、レバノン国外での犯罪を問われているのだから、我々の

要求にレバノン政府は応じるべきだ」と語った。

2、レバノンと日本の関係

石垣大使は60歳。レバノン内戦で大使館が閉鎖された9年間があったが、日本の終戦後の復興を回想しながら、内戦後の復興が著しいレバノンの現在に言及し、「どのような方法であれ、可能な限りの方法で、レバノンとの外交関係と中東和平への貢献を行っていく」と語った。依然として、経済力を持った日本がいかなる形でその政治的利権を行使してくるかは定かでないが、「日本は政治的枠組みや、経済的な協力関係に非常に熱心に取り組んできた。第三世界に対しての援助は米国を超える最大の貢献をしてきた」とレバノンへの関心を示した。

3、ゴランへのPKO

ハリーリ首相の96年6月の日本訪問、そして97年11月の2度目の公式訪日など、日本の外交政策について、「日本の政策は米国・欧州とは異なるが、それは日本が中東の原油に多大に依存している点である」とし、「我々は米国や他国がパレスチナを承認する前からパレスチナ政府ともコンタクトをとり続けており、イランにも継続して大使を置いている」と語った。

また「我々は国連決議425を支持している。そして96年には、国連停戦監視軍として50兵士をゴラン高原に派遣した。しかしながら、我々の戦後の"平和憲法"によって、レバノンには兵士を派遣できない。停戦が成立している地域にしか派遣できない」と指摘した。

4、レバノンへの援助

日本の援助政策については「文化的分野に集中して行っている」とし、96年ベイルートの教育施設への援助、バールベックの公共公園、バールベック・ヘルメルの飲料水供給プロジェクトに対して17万4000ドル(2262万円)、そして昨年、アレイ、ナバティーエ、バールベック・ヘルメルへ24万5000ドル(3185万円)の援助をした。「これらは象徴的な援助であり、今後も小さな地方の村落に小額づつ、直接に人々の利益になるような援助を続けていく」と語った。

5、結び

最後に、石垣大使は在レバノン・日本大使館のスタッフが当初の4名から現在は11名にまで増えている点に言及し、「私の着任当初に日本レストランはたった1つだけだったが、現在は4つになっている。依然として日本人コミュニティーは60名である。通常、5000名の日本人に対し、日本レストランが一つというのが海外での標準的な割合である」と日本とレバノンとの関係がいかに強いものに変わってきているかを強調した。

(以上、98年3月9日デイリー・スター紙スタッフ・ライターのマルリン・ディックのインタビューに基づいた記事の要約でした)

編集部注

4つの日本レストランとは 恐らく

①東京(マナーラ/ベイルート)
②日本丸(タバルジャ/ケスルワン地区)
③ミチコ(ラオシェ/ベイルート)
④紅花(ハムラ/ベイルート)
⑤東京鉄板焼き(アドニス/ズークムスバ地区)、の内の4つを指したものと思われます。

☆☆☆

6、我々が考えるべきこと

ここで確認すべき点は、先日、丸岡さんからもご指摘が為された様に、日本のレバノン当局への政治圧力は、経済的な援助を後ろ盾としながら、その基調が***「日本に身柄を引き渡しても決して死刑にはしない。だから引き渡しはレバノン・シリアのアラブでの面子を汚すことにならず、人々からの非難もかわせる」***というものである点です。

従って、我々は、「岡本さんがリッダ闘争で死刑になる可能性がある」という点を日本の刑法上の問題(再裁判・死刑問題)として、刑法解説や判例から取り上げ、アムネスティ・インターナショナルを初めとする死刑廃止運動を学習することにこれまで重点を置いてきましたが、それだけでは不十分であるということが明らかになりました。

「死刑にならないのならば、引き渡しもやむを得ない」とさせる方向でレバノン政府への働きかけが行われているようです。

レバノンの救援会と協力し、***"ルミエ刑務所の彼らの意志である"即時釈放・政治亡命"をあらゆる形で実現し、日本への引き渡しは絶対にさせないぞ!!"***

☆☆☆

<定例会へのお誘い>

毎月第三土曜日に日本キリスト教会館で定例会を行っています。挙ってお越しください。

レバノンの救援会である"岡本公三と彼の同志の友人達の会"の立場・目的は前回、ご紹介した通りで大変明快です。

①岡本さんと彼の同志たちの即時釈放
②レバノンで彼らの政治亡命を認めさせる
③この運動は民主主義的で平和的で誰も排除しない

一方、我々の立場と目的はどうでしょう。

救援活動は、本人の意志をとことん支え、国家権力による本人の意志に反したいかなる強制にも反対し、闘うことだと思います。反権力・反弾圧です。

会の定例会ではこれを大前提として、どうやって、いろいろな人と広く出会っていくのか?を討議しています。討議は毎回、白熱し、「じゃあ、一体具体的には何をするの?」という点が抜けてしまいがちですが、会員は皆、それぞれに真剣にやっています。

読者の皆さんも、毎月第三土曜日に定例会に参加しませんか?新鮮なご意見・アイデアをお待ちしています。

☆☆☆

寺

少し蒸し暑い、４月の昼下がりに、うぐいす谷の駅で待っていた。お骨を抱いた一行が着き皆で寺に向かった。後に尾いていった。

表通りもせわしさはなかったが、路地に入るとずっと変わりない落ち着きがあり、人は緩みはじめ、足取りも三々五々となった。そこは寺の群落なのだろうが、人の生活と見事に溶け込んでいるように思われた。力を抜けさしてくれる町並みだった。

西念寺という名を聞いたのは前日で、泉水さんのお兄さんのお骨も安置されていると聞いたのは当日だった。ああ、そうだったのか。こうして都内にまで足を延ばし法事に出るのは２度目だったが、奇遇と言えば奇遇。

いつごろからか、お寺さんやキリストさんのお墓にむかうと手を合わせるような気持ちになっている。その頃からか、酒の量も増えたのではないだろうか。前日も、ほとんど記憶がない深酒をしている。

じっとりと汗ばみながら寺に着くと、立派な寺であった。こんなに立派な寺とは思ってもいなかった。周囲の寺々よりは大人しい構えだったが、朽ちた軒の期待は裏切られた。

小さな犬を抱いた女性が一行を出迎えてくれた。寺の方だった。一歩、中に入ると冷気が伝わってき、二日酔いでおぼろげだった視線が焦点を結びはじめた。堂は天井も高く、人の緩みは別な緩みに変わっていく。

坊さんのお経が朗々と響き、弔うとは、弔うとは、繰り返し語りかけられることになった。今、弔うとはどんな合戦に向かう死者との交差なのだろう。

寺を後にし、一行はおびだたしい酒を流し込んだ。三々五々の足取りで家路に着く者、ひたすら飲み続ける者。どんな合戦か、いずれ像は結ばれる。

４月吉日　　檜森

仲間達へ　98.3.29　浴田由紀子

桜が咲き始めました。ようやくに春本番です。お元気ですか。

春だというのにこの国は、歯止めのない凋落の時代を迎えているみたいで、新聞を開いては「こんなことがまかり通るわけ？」と毎日のように驚嘆の声を上げています。しかし、なげいてばかりいても世の中変わらない。選挙で選ばれたわけでもない人々に好き勝手に国を牛耳らせて、選挙で選んだ人々が私利私欲にうつつをぬかすのを許し、アレヨ、アレヨという間の戦争体制作りを無党派だの無関心だのといって見過ごしているのは、他でもない我々自身が「主権」を放棄している姿に他ならないのですから。一つ一つの局面で、自ら誰かが用意してくれるわけではない自分達の未来のために、歯止めになって真の民主主義を確立していく闘いにとりかからなければです。

一国の人権状況を最も尖鋭に表出するところの塀の中も、着々と新手の抑圧体制が進められようとしています。端的には、昨年吉村さんが数回にわたって報告していた領置物数量規制と、それに関連して行なわれている訴訟資料の所持制限です。領置物規制とは１カ月の入居者も20年の者も一律にその所持品を46ℓX2.5箱におさめろ、というものであり、訴訟資料制限とは房内での訴訟関連書類の所持（公判期録・調書等弁護人から差し入れてもらう書類）を2m以内に制限するというものです。（旧来このような制限はありませんでした）元来、裁判への円滑な出廷を担保されているはずの未決被告人の訴訟書類の活用を制限するということは、裁判を保証しないということです。そんな法があるわけがありません。にもかかわらず東拘は、昨年秋、領置物数量規制の施行に乗じて実質的に弁護活動・裁判を受ける権利の侵害・介入を開始したわけです。この規制の意図するところは、明らかに熱心な弁護人に支えられて、冤罪や、上級審を丁寧に闘おうとする者達の裁判闘争を困難にすることにあります。女区長は私に対して、「他の者はこんなにいっぱい持っていないんだから」と繰り返しています。大部分の被告人は、充分な弁護も受けられないまま数回の簡単な裁判で次々と刑を言い渡されて下獄させられているのですから。裁判闘争を闘う者、良心的弁護人の活動への意図的妨害といえるでしょう。このところのオウム裁判への簡略・拙速の圧力と共に、司法を人権の砦としてではなく、支配の道具として活用しようとする者達の意図の現れでしょう。

一方、国会では「組織的犯罪対策法案」が閣議決定され、今国会での成立を目論まれています。憲法・刑法・刑事訴訟法の原則を大きく逸脱し、戦時体制作り、人民の支配管理体制作りの一貫としてみることは言うまでもありません。オウムを口実に、兇悪犯罪を口実に、ひとつひとつ進められる人権侵害・憲法の骨抜き・戦時体制作り、人民の管理・支配強化に、塀の内側からも持ち場の防衛をしっかり担っていきたいと思っています。共通の敵に対する、共同の闘いとして、共に進むことを呼びかけます。

真の人民主権を、足元からの民主主義の実現の中から、断乎築きあげていきましょう。
共に！　春、いっぱいお元気で！

ゆき子

（はるいちばん）

【春一番】　その年に初めて吹く、春をつげる強い南風。
＜the first gale in the spring.＞

○浴田さんは４月中に懲罰を受けてしまい、原稿の発信ができませんでした。仕方なく、先月号での未掲載の原稿のみ掲載します。御免。

●図書紹介●

村岡到『社会主義へのオルタナティブ』(ロゴス社1997.10)

浴田由紀子（東京拘置所）

本書は、社会主義の可能性を一貫して追求しつづけている村岡到氏の政治論文集である。村岡氏は1960年の安保闘争以来の新左翼活動家である。私自身が公判に付されている1974～75年の東アジア反日武装戦線による海外進出企業爆破闘争を担っていた頃、彼は第４インターの活動家であった。少し先輩の同時代人は今、「カオスとロゴス」編集長として＜社会主義への初志＞を貫いている。

編集の最後に補論として「梅本主体性論の今日的意義」（1976.『現代の理論』）が収録され、「梅本主体性論は、私のバックボーン」だと明記されている。村岡氏は「灰の中のダイアモンドを見つけ、＜社会主義のユートピア＞と社会の存続さえ不安な、この現実とを架橋することこそが、『20世紀の罠』（アレクサンドル・ブズガーリン氏）の深さを知って、21世紀に生きる知恵のある者の使命である」と、自らの営為を位置づけている。

「第Ⅰ部　社会主義への経済的接近」では、『共産党宣言』における、「まず政治権力を獲得する」という周知の命題を検討することからスタートする。このマルクスの提起を「唯一目的」であるかのように理解した新旧左翼の限界とその誤りを指摘し、「政治権力の獲得」は「資本の奪取」のための一つの手段であることを強調する。「この命題は実は、必要条件であって、十分条件を示すものではなかったのである」。しかも、「資本の奪取」とは「まったく新しい生産関係を創出する」ことなのであり、「＜労働市民階級＞が事前に生産のための基本的な能力を形成すること ―― これこそが『資本の収奪』を実質的な意味で実現するための＜十分条件＞なのである」。ここから、村岡氏は「社会主義への道は、政治的にだけではなく、経済的にもその接近の形態を探り、同時平行的に推進しなければならなかったのである」と結論する。

その＜社会主義への経済的接近＞の道として、提起されているのが＜利潤分配制＞である。＜利潤分配制＞という言葉を初めて聞く私には、その内容が今ひとつよくわからないが「＜賃労働と資本＞という経済システムの根幹を質的に変化させる可能性を拡大するという点にこそ意義」があると主張する。遠い未来のことだけを夢想するのではなく、今私達が生きているこの現実からいかに変革を開始するのか、この視点こそが村岡氏の一貫した姿勢である。

「第Ⅱ部　オルタナティブのための諸提案」と、「第Ⅲ部　情勢分析のために」では、1990年以降に生起したさまざまな政治的事件や社会問題をテーマにしてその時々に論評した論文で構成されている。「クリル諸島は呼びかける」「報道オンブズマンの設置を」「土地の自治体所有を」「竹島の日韓共同管理を」「TBS坂本ビデオ問題の核心」「『党議拘束』は遺物か」「MRTAの銃口が教えるもの」など。時事的問題を取り上げながら、たえずそこから原則的問題や社会主義の萌芽を探る姿勢が貫かれている。この姿勢について村岡氏は、「序共産党の社民化と社会主義派の存在意義」で「空論的に『社会主義の立場』を叫ぶのではなく現実を直視してその現実を当該の問題に即して一歩改善する政策を提起することと合わせて＜社会主義への道＞を提示する立場と能力がぜひとも必要」なことを明らかにしている。

こうした姿勢の欠如こそが、この国において未だに勝利を導きえていない根拠の一つであることを、私達も痛苦な教訓にしてきた。「アンチ」に留まり、あるいは他党派の批判によって自らの正当性を主張する。分裂と対立を重ねることによって結果として、敵を利し続けてきたのではなかったのか。現実を直視し、今からの変革に着手すること、そこに＜社会主義に向かう＞新しい人・社会関係を創り出してゆくことが、これまでの新左翼の限界を超える道だと痛感する。

村岡氏の文章には、読者への質問が多用され、思いもかけない答えが返ってくる。柔軟な発送と創造性の豊かさが感じられることも付言しておきたい。どう社会主義を実現するのか、そのイメージの具体的な一つひとつをもっと学習し、議論も積み重ねなければならないのだが、とにかく元気が出てくる。＜ともに歩を進めたい＞と思う。

「逆風の中でこそ潮を読み、舟を漕ぎ続ける者の存在なしに、舟を目的港に着けることは決してできない」という、私が前から好きな言葉を想起しながらこの論文集を読了した。

1997.11.7　ロシア革命80年の日に

●編集後記●

●私は、救援ということに関わっていながら最近になってようやく『全国監獄実態』（緑風出版）を読んだ。今まで、自分の勘違いしていたことや知らなかったことなどが、これによってあらためて知ることができた。獄中弾圧の実態について、私の認識が薄かったためにこれまでにも獄中者に我知らず迷惑をかけていた。

とくに医療。これについて認識を改めなければならなかった。医療刑務所というものがあるが、それまで私は、医療刑務所は「食事が他より良い」「時間に余裕がある」「工場に出ても軽作業」などという、新右翼などの著作内容を比較対象にしてしまい。私も、比較的一般の刑務所よりは楽な場所なのか！？と思っていた。だが、この『全国監獄実態』で、精神病舎囚処遇の証言を読んでみると「とてもそんな呑気なことでは済まされないぞ。むしろ最悪だ」というまさに獄中弾圧の最深部！といった感じがしたのである。当局にタテをつけば、正常の者も精神病質者の診断を出されてしまい、強制治療や強制投薬などが行なわれているという。果ては、獄中者（患者）の証言から彼らに接した看守や医師達の発言を抜粋、紹介すると、なんと以前は他の獄中者に対して「脳手術（ロボトミー）を行なっていた」可能性を指摘している。これがもし事実ならば、旧日本軍の人体実験に匹敵する犯罪である。人間を使ったモルモット実験場でる！！　だが、この獄中者達の証言は70年代のものであるから、現在はどうなっているのかがわからない。

私はこの「監獄実態」を読んでいて怒りをおぼえると同時にこのような施設のあり方が一般市民にあまり知られることなく存続し続けていることが許せないと感じた。今後もっと調べてみたい。

●4月22日、カイロにあるアラブ連盟本部においてアラブ連盟法相会議（各国内務・法務閣僚会議）が行なわれた。これによって、アラブ諸国間による初めての、テロに反対する国際協定「反テロ協定」が署名された。しかしこの協定は、外国勢力による侵略と占領に対する武装闘争は、テロには当らないとして、対イスラエルへの武装闘争はテロなどではなく、自由を求める人民の正当な闘争であると明言した。シオニズム・帝国主義粉砕★

●レバノン・ルミエ刑務所での獄中処遇改善を求めた「暴動」のニュースは、遠く日本の私達にも良い刺激となります。果たしてこれがカンフル剤となるのでしょうか？　　では、また…（W）

◎浴田由紀子さんの公判日程

5/13，/29，PM 1:30～
6/12，/23，東京地裁
7/9，/23，531法廷
傍聴券の配布はありません。

浴田懲罰！報告

関係支援者からの未確認情報であるが、浴田さんが東拘の領置品規制を受け、彼女の裁判資料・供述資料などが規制の寸法（数量2メートル）より、わずか数ミリ程度超えていたために「領置品数量オーバー」の違反としてその懲罰（外部交通の制限）を言い渡されたが、彼女はこれに抗弁して、更に追加懲罰を受けてしまった。彼女への弾圧は、最初の臨検ときは規定パスしていたのに、その後の検査で計ったら「数ミリ多い」と来たもんだから、あきらかに当局の難がらせだ。誰だって頭に来るのは当然だ。彼女の懲罰は、4月の末から5月の6～7～8日くらいまで行なわれた。当局のこのような集中攻撃は断乎許せない。

たとえ本当にオーバーしていたとしても「たかだか数ミリ程度の間違いくらいが何だというのか。2メートルの高さを測るのに、数ミリに拘わっていてどうするというのだろう！」詳細は次号で！